会員の広場
Member's Open Space

川柳で綴る遊里史（その2）

●美唄歯科医師会会員
雨田　実

先号で幕府公許の遊里吉原の成り立ちと繁栄ぶり，そこで働く女性について述べたが，今回は男性について述べる。

堤から下りる所に門を建て

これは吉原の入口の門を大門と呼ぶが，新吉原では，日本堤から坂を下った所にあったためで，江戸時代の大門は明六つに開け，夜は四つ（午後10時）に閉め，その後は左のくぐりから出入りさせた。四郎兵衛のこと。

花守りの生まれ変わりか四郎兵衛

といわれたように，大門を入ると右手の廓の出入口に，遊女の逃亡を監視する四郎兵衛の会所があり，同心の手先の詰める番所もあって，遊女の逃亡防止のため乗物はすべて禁止された。四郎兵衛の呼称は総名主，三浦屋四郎左衛門の雇人の四郎兵衛という者を会所に詰めさせたもので，それ以後その名が世襲された。初め7人の人数であったが，後に人数が倍加され，これらの番人を四郎兵衛と呼び大門を固めていた。廓の周囲は俗に，おはぐろどぶという堀で囲まれ，当初は出入口は大門のみで，特に女性の出入りを取り締まった。それでも遊女は手を変え品を変えて脱出を企てたので，警戒は厳重を極めた。

四郎兵衛をおそろしがるがおそろしい

脱出を謀る遊女の心をいっているが，その下心こそ恐ろしいのである。

優男（やさおとこ）待てと四郎兵衛ひっとらえ

男の皮をかぶったをつかまえる。男のなりをして脱出を謀った遊女を取り押さえたのである。

四郎兵衛から受け取りて柱にくくし

遣り手による仕置きの始まりである。竹にて絶え入るまで打ち，或いは丸裸になし，口には手拭いを喰わせ，肢体を四つ手に縛り上げ，梁へ釣り上げ打つという如き，すさまじいものだったという。そのうえ，格下げされて，下等な河岸見世に落とされたり，岡場所へ鞍替えさせられたりしたという。

幇間（たいこもち）（男芸者のこと）

吉原の大まがき級の大見世では少数の女芸者を抱えていた，これを内芸者と称した。店が多忙なときはこれとは別に，見番（けんばん）を通して呼ぶ，たいこもちと女芸者がいた。色道大鏡（しきどうおおかがみ）には，太鼓（たいこ）ともいい，紀州雑賀（さいが）踊りよりはじまる。

鐘を持ちたるは首にかけて踊る，鐘もたぬ者に太鼓を持たすなり。よって名付くなり

とある。酒興の席で金持ちのきげんをとる。金持たぬものを意味したという説。また，太鼓，末社（まっしゃ），神などと呼ぶのは，みな神楽（かぐら）の縁語で金持ちの大尽（だいじん）を大神に擬したという。また江戸では芸者とは大略女芸者で，幇間は男芸者，京大阪では芸者とは幇間なり。女芸者はげいこというとある。吉原大全には太鼓というものは，客の心をうけ遊女の気をはかり，茶屋，船宿までに心をそえて，座のしめらぬように取りはやすをもって太鼓の名あり。機転，才覚なみなみなることにあらず。初会（しょかい）（初

めての客のこと）は勿論，うら（2回目の客）なじみ（3回目以降の客）のかたえいたりても，太鼓などつれずしてはかなはぬ事也とあり。太鼓とはよく口をたたくの義。

面の皮うすいとなれぬ太鼓持　大門の内は太鼓のたなごころ　太鼓持アリンス国の通辞也で

大門に入れば，すべてを切り廻すのは彼らであり，アリンス国の酒席には欠かせぬ人材でもあった。

若旦那小さいぞえと太鼓いい　身代を投げて見ねばと太鼓いい

けちけちせずに，遊びに全財産を投入せよとすすめるのだから始末が悪いが，それだけに。

取るものを取ると太鼓は静かなり

金のなくなった若旦那には用はないとなる。女衒のこと。

大病に女衒の見える気の毒さ　水害の畦をふみ分け女衒来る　浪人だそうなと女衒路地に待つ

父の医療費のため。水害での年貢のため。貧亡浪人の娘故とさまざまの理由での，身売り娘の仲介者で女衒と呼ばれ，父親や伯父の名で娘たちの身元引受人となり，娘たちは形式的には給金前借の年季奉公人となった。

仮の名は伯父，本名は女衒なり

という句はその事情を語っている。こわいのは女衒，雷，火事，やり手とも詠まれ。世事百談には，人の口入れをするを，慶安といい，遊女の口入れをぜげんという。衒はうると読めりと語源にふれている。

吠えるなら売るぞとぜげん子を叱り

女衒であるゆえ我が子を叱るにも職業の匂いがただよっている。

妓夫のこと（後年妓夫太郎，妓夫ちゃんともいう）

廓で働く若いもの全部が妓夫であるが，遊女と客の間を取り持つ役の男だけを妓夫と思われていたようだが，妓楼の使用人の男衆を若い者といった。

これじじい若い者とはそのほうか

の句の如く老人でも若い者と呼んだ。仕事は見世番。すっかり大衆化して格子の間から内部にいる遊女を物色出来る店作りが多くなった江戸中期以降の吉原では，大籬の大見世が少なくなり格子の中の遊女に気に入ったのが居れば，その場で妓夫と掛け合って話が決まれば，そのまま登楼するというあんばいで，揚屋も茶屋もいらない簡単になった。安上がりのため，大衆には大当たりしたという。妓夫は客を見ると，

どれなりとおっしゃってはと若い者

の句の如く，仲介役に忙しかった外に，上階番，不寝番，さがり取り（未払い遊興費の取り立て）などと若い男の仕事は多かった。

始末屋のこと

またおめえかと始末屋もあきれてる

の如く未払代金の取立を業とした。始末屋は田町（現浅草5丁目）の越前屋と青柳が有名で，いずれも岡っ引きの手先の兼業であったという。それでも高級指向の上客向きの少数の遊女は格子から中の見える張見世に出ないで昔の如く茶屋を通して客に接した。これを呼び出しと名付け，

鳳凰は燕雀をつれ仲の町

の句の如く，新造と禿をひきつれ，仲の町張り道中をしながら，仲の町の引手茶屋まで出向き，張り見世には出なかったという。往年の太夫も揚屋と共に宝暦（1751～64）ごろなくなった。後の幕府の公許遊里として金棒引きから遣り手まで引き連れた往年のおいらん道中には及びもないが，アリンス国のせめてもの，ほこりというものでもあろうか？次回は遊客の種々像について述べたい。